

イコン——受肉の神秘への眼差し

西南学院大学博物館
学芸調査員 宮川 由衣

はじめに

イコン（聖像画）は、ギリシア、ロシア、そして東ヨーロッパの国々など、ビザンティンの伝統を担う東方正教会の祈りにおいて重んじられてきた。人々は、イコンの前で十字を切り、それに接吻する。教会堂の奥には、複数のイコンが掲げられた祭壇障壁と呼ばれる壁（ギリシア語でイコノスタシス、「イコンを立てる」の意）があり、聖職者がその扉を通して壁の内側と外側とを行き来し、キリストを記念する聖体礼儀（典礼）が執り行われる。香炉の煙と香りに包まれたほの暗い教会堂に、蠟燭の明かりが灯され、イコンを照らし出す。

イコンには、キリストや聖母子、そして諸聖人の肖像のほか、キリストの生涯や聖母マリアの生涯などを表した物語場面が描かれ、基本的には卵白を溶剤とするテンペラ絵の具で板に描かれる。また、板以外にも象牙板や真鍮、また金属板を打ち出したものなど、その技法は様々である。

ところで、「イコン」という言葉はギリシア語の「エイコーン（εἰκών）」に由来し、それは「似像・似姿」ないし「写し」を意味する。この「似像」という言葉は、『創世記』1章、世界創造の第6日目に、神によって以下の文脈において語られる。

神は言われた、われわれはわれわれの似像 (eikōn) と類似性 (homoiōsis) に即して人間を創ろう。……神はその似像に即して人間を創り、男と女とに創った。(創世 1, 26-27)¹

これは旧約聖書のはじめに高らかに宣言された人間把握である。しかし、そうした創造の本源の姿は、人間のいわゆる原罪（創世 3, 1-13）によって崩されてしまう。そして、神と人間との間には掟が立てられた。周知のように、神がモーセに授けた十戒の掟は偶像崇拜を厳しく禁じている。その第二戒には、「あなたはいかなる像も造ってはならない。……それらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない（出エジプト 20, 4-5）」とある。

ここで一つの問いが生じる。「イコンにおいてキリストや聖母子を描くのは偶像崇拜ではないのか」と。実際、ビザンティンにおいては、「イコンの使用は偶像崇拜である」とするイコノクラスム（聖像画破壊運動）との格闘の歴史があった。

さらに、旧約聖書においては、偶像崇拜と同様、神を見ることも徹底的に否定されてきた。『出エジプト記』33章で神がモーセに次のように告げているとおりである。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである」（同 33, 20）と。

しかし、新約聖書において、目に見えない神の永遠の力と神性とは、イエス・キリストという存在を通してこの世界に顕現する。それは、ヨハネ福音書の冒頭、「神の言（ロゴス）は、肉となって、われわれのうちに宿った」（ヨハネ福音書 1,14）

という言葉に表される「受肉」である。あらかじめ結論を示しておく、教父たちはこのキリスト教の根本とも言うべき重要な事態、すなわち「キリストの受肉」という神秘を見つめて聖像画破壊主義と闘い、イコン崇敬を神学的に証したのである。この点を踏まえ、まずはイコンをめぐる論争とその歴史的背景を振り返っておこう。

イコノクラスム（聖像画破壊運動）とその歴史的背景

8世紀から9世紀にかけてビザンティン帝国で起こったイコノクラスム（聖像画破壊運動）は、時の皇帝の判断によって始められた。最初に聖像画破壊主義の姿勢を示したのは、皇帝レオン三世（在位 717-741）である²。レオン三世のもと、754年に公会議が招集され、イコノクラスムが決議された。また、続くコンスタンティノス五世（在位 741-775）は、自ら聖像画崇拜を攻撃する神学論文を著している。J・メイエンドルフによれば、こうした聖像画破壊主義運動の内部には次の三つの歴史的要素が現れてくるという³。

(1) 宗教文化の問題

ギリシア語文化圏のキリスト者たちにおいては、過去の異教時代から宗教的な像への嗜好が継承されていた。初代教会が「そのような美術は偶像崇拜的である」と断罪すると、三次元の形態は実質的には消滅したが、新たなキリスト教的二次元の形態が姿を現した⁴。

一方、東方のその他の文化圏のキリスト者たち、とりわけ、シリア人とアルメニア人とは、元来、画像の使用に傾くことははるかに少なかった⁵。現に、聖像画破壊主義を支持した皇帝たちは、イサウリアやアルメニアの出自であった。聖像画破壊運動を開始したレオン三世はイサウリア出身であり、その後、レオン四世（在位 775-780）が没し、未亡人のイレネが摂政となってイコン崇敬を復活させるが、アルメニア出身のレオン五世（在位 813-820）が即位すると、再び聖像画破壊主義運動が起こった。

(2) イスラム教との対決

また、アラブ人によるパレスティナ、シリア、そしてエジプトの征服以来、ビザンティン帝国は常にイスラム教との軍事的・思想的対決の中にあつた。その中で、キリスト教のイコンの使用をめぐる、偶像崇拜であるという非難が繰り返し行われた。こうした中、当時の皇帝たちは、イスラム教によるこのような批判に対処できるよう、キリスト教を純化することを試みたのである。

(3) ヘレニズムの靈魂論の遺産

さらに、聖像画破壊主義的思想傾向は、初期のキリスト教にまで遡ることができる。キリスト教の初期の弁証家たちは、

神の表現を一切認めない旧約聖書の禁令をユダヤ人と同様、文字通りに受け取っていた。

キリスト教の図像表現はすでに三世紀には栄え始めていたが、いわゆるオリゲネス主義の周辺では、プラトン主義的靈魂論の影響があった⁶。それは、物質に、神によって創造された永遠の存在があることを否定し、唯一の真の實在は「知性的なもの」であると主張するものである。そして、こうした思想的伝統にあっては、聖像画破壊主義的傾向が存続していたのであった。皇帝コンスタンティヌスの妹コンスタンティアがエルサレムを訪問し、エウセビオスにキリストの画像を求めた時、彼女の受けとった回答は、「イエスの物質的な画像への彼女の関心は真の信仰にはふさわしくない」というものであった。最初の聖像画破壊主義者である皇帝レオン三世の神学顧問たちはオリゲネス主義者であり、エウセビオスと同一の見解を持っていたことは確かであった。

イコノクラスムの克服

さて、レオン三世がイコンに反対する公式の勅令を發布する以前に、すでに宮廷の中には聖像画破壊主義が起り始めていた。こうした中、コンスタンティノポリス総主教ゲルマノス一世は、聖像画破壊主義に対し、「イエス・キリストの肉における生涯」、すなわち「受肉」というキリスト論的論拠を使って反論している。

われわれの主イエス・キリストの肉における生涯と、その受難、救いを与える死、そこから生じる世界の贖いをめぐる永遠の想起の中で、われわれは、キリストをその人間的な姿で——すなわち、目に見える顕現によって——表現する伝統を受け、このようにして「言（ロゴス）なる神」の自己無化を崇めていると理解してきた⁷。

このように、ゲルマノスは、聖像画破壊主義に対する正統主義の最初の証人となった。その後、イコノクラスムの克服に大きな役割を果たしたのが、ヨハネス・ダマスケヌス（680頃-749/754頃）とストゥディオスのテオドロス（759-826）であった。ヨハネスの最初の論文は、次の言葉で始められる。

わたしは、見えざる方である神を、見えざる方としてではなく、肉と血への参与によってわれわれのために見える方となった限りで表現する⁸

ヨハネスはさらに次のようにも述べている。

以前には、神は体も形も持たず、どのようにしても表現されることはできなかった。しかし今日では、神が肉において現れ、人間の中に住まわれたので、神の中に見えるものをわたしは表現することができる。わたしは物質を崇めはしないが、物質の創造者、わたしのために物質となった方、肉の生命を担った方、物質によってわたしの救いを達成した方、をわたしは崇める⁹。

このように、ヨハネスが強調するのは、「神自身の意志によって、物質的な存在を担い、物質に新たな機能と尊厳とを与えることによって、神は見えるようになった」¹⁰という点である。また、ヨハネスは、聖像画破壊主義が、「像」と「原型」とを同一視していることを非難した。子と聖霊だけが父たる神の「本性的な像」であり、父と同一本質（実体）であるが、神のそれ以外の像は本質的にはその原型とは違っており、したがって「偶像」ではないのである。

787年の第2ニカリア公会議では、「像」と「原型」、それぞれへの祈りが次のように区別されている。

われわれがイコンに捧げるのは「接吻」と「畏敬のプロスキネーシス」であって、「われわれの信仰による真実のラトレイア」ではない。ラトレイアは神性のみによらぬもので、われわれがイコンに捧げるのは生命を与える貴い十字架の像や聖なる福音書やその他の敬虔な捧げものに対するのと同じプロスキネーシスである。またイコンの礼拝には、昔の人々が敬虔な習慣としていたように、香や蠟燭が捧げられるべきである。¹¹

ここでは、「ラトレイア」（礼拝）と「プロスキネーシス」（崇敬）という二つの祈りが区別されるが、それは第2ニカリア公会議以前にヨハネス・ダマスケヌスによって論じられていた。神に対しての祈りは「ラトレイア」、それ以外の被造物に対しての祈りは「プロスキネーシス」という言葉で表される。このうち、前者は「絶対的祈り」、後者は「相対的祈り」という意味合いである¹²。したがって、被造物であるイコンへの祈りは「プロスキネーシス」（崇敬）であって、「ラトレイア」（礼拝）はその原型たる神に対してのみ捧げられるのである。

さらに、修道制の主要な改革者の一人であったストゥディオスのテオドロスによってもイコンは擁護される。テオドロスによれば、キリストのイコンは「人間イエスの像」であるだけでなく、「受肉したロゴスの像」でもあるという。イコンを可能にさせるキリストの人間性は、神の像を再び完全に担っている「新しい人間性」である。そして、この事実、美術の形式としてのイコンの手法に反映されねばならず、したがって、美術家はこのようにして疑似サクラメント的な機能を受けとるのである¹³。

テオドロスは、美術家を、自分の像に従って人間を創った神自身にたとえる。

神がその像と似姿に従って人間を創ったという事実は、イコンの手法が神的な行為であることを示している¹⁴。

そして、842年に皇帝テオフィロス（在位829-842）が没し、未亡人のテオドラが幼い皇帝ミカエル三世の摂政となって再びイコン崇敬を復活させ、843年にイコノクラスムが終結した。

メイェンドルフは、イコノクラスムとその克服について、「正統主義の勝利は、宗教的な信仰が命題、書物、個人的な体験だけでなく、物質に対する人間の力、美的な体験、聖像画の前での動作や体の所作によっても表現されることができると

いう意味を持っていた¹⁵と述べている。

アイコンが証しするように、「素材・物質」は神性を宿す器ともなり得るのである。それは、キリスト教の伝統においては「魂のみの救い」が語られることがなく、「身体」ないし「身体性」が極めて重要な意味を持つことに関わっている。そこで次に、キリスト教の伝統において重視される身体性に注目し、アイコンが東方キリスト教の伝統において崇敬されてきた意味を考えたい。

「神の似像の再形成」と身体性

さて、本稿のはじめに見たように、「アイコン」（聖像画）という言葉はギリシア語では「エイコーン εἰκών」、すなわち「似像」であった。そしてそれは、「われわれはわれわれの似像 (eikōn) と類似性 (homoiōsis) に即して人間を創ろう」（創世 1, 26）という神の言葉に表されていた。これは、聖書における人間観の中心に関わる表現であり、「神を受容し宿しうるもの」という人間の最上の希望を指し示すものである。

しかし、この「神の似像」とは、われわれのなりゆくべき姿であって、すでに成就している姿ではない。「神の似像」は、この歴史的・時間的世界にあってはあくまでも「人間の原型ないし範型」として志向されるものとしてあり、その道行きにあって、「身体性」や「時間性」が人間の変容可能性を担う不可欠なものとして用いられるのである。

このような、われわれ人間の救い（完成）の根拠となるのが、神の言（ロゴス）の受肉の真実にほかならない。そこで、再びヨハネ福音書の一節を引用したい。

神の言（ロゴス）は、肉となって、われわれのうちに宿った。（ヨハネ福音書 1,14）

325年のニカイア信条は、アレクサンドリア派がキリストの人性のみを主張したのに対して、「キリストは神と同一実体 (homoiōsis) であり、また真の神にして真の人間である」とした¹⁶。ここで注目されるのは、この言明が客体としてのイエス・キリストについての把握である以上に、われわれ人間の救い（完成）との連関の中で、それらの成立根拠として語られていたということである¹⁷。

ニカイア信条成立の立役者であるアタナシオス (295頃-373) は、言（ロゴス）の受肉について次のように述べている。

神のロゴスが人間となった（人間のうちに宿った）のは、われわれが神になる（神に与らしめられる）ためである¹⁸。

「われわれ（人間）が神となる」とは、「神の似像」を成就させることである。こうした「神化」(theōsis) の思想は、東方キリスト教・ビザンティンの伝統にあって、とりわけ大切にされてきた。「神化」とは、端的に「人が神となること」を意味しているのではなく、神的生命への与りの道と解される。すなわち、「神の似像の成就」の道にあって、身体が器となって、われわれ人間は神の本性ととの結合へと与ってゆくべく呼びかけられていることを意味するのである。

おわりに

アイコンを前に祈り、観想するとき、われわれのうちにその原型が何ほどか映じてくるであろう。アイコン、すなわち「像」とは区別される。ゆえに、アイコンそのものは祈りの対象ではない。しかし、われわれはアイコンを通して、その原型へと思いを馳せ、神の本性へと与ってゆく道を多少とも歩むことができるだろう。神の言（ロゴス）は、肉となって、われわれのうちに宿ったのだから。アイコンはこうした受肉の神秘を証している。

- 1 新共同訳では、「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」と訳されている。東方キリスト教の伝統において用いられてきた七十人訳・ギリシア語聖書に即せば、「似像と類似性に即して人間を創ろう」と訳される。なお、ここで「われわれ」とあるのは、一般に「神の尊厳複数」——教父の伝統にあって、「父、子、聖霊」の三位一体がすでに含意されていると解される——を示すとされる。
- 2 726年の夏、エーゲ海で海底爆発があった。皇帝レオン三世は、これを神の怒りと見て、その原因はアイコン崇拝であると考えた。そして、コンスタンティノポリスの宮廷への中央入り口であるカルケー門に掲げてあったキリスト像を取り払うよう命じたという（鐸木道剛、定村忠士『アイコン——ビザンティン世界からロシア、日本へ』毎日新聞社、1993年、p. 35）。
- 3 John Meyendorff, *Byzantine Theology: Historical Trends and Doctrinal Themes*, Fordham University Press, New York, 1974, reprinted, 1983, pp. 42-53 (J. メイENDORFF 『ビザンティン神学——歴史的傾向と教理的主題』鈴木浩訳、新教出版社、2009年、pp. 72-90) 引用文について、基本的に邦訳に準拠したが、論述の都合上一部表記を変えたところもある。
- 4 なお、コンスタンティヌス帝の友人であり、初代教会の貴重な記録である『教会史』を著したエウゼビオスの記録によれば、カエザリア・フィリップの町には、イエスの似姿（エイコーン）であると言われたブロンズ製の彫像があったといひ、エウゼビオス自身、その像を見たことがあると記している。それは、マタイ福音書 9章 20節以下、マルコ福音書 5章 25節以下、ルカ福音書 8章 43節以下に語られる、キリストによる長血の女の癒しを記念した像であり、その家の前に、両手を伸ばして嘆願しているポーズの女の彫像と、それに向かって片方の手を伸ばす男の像があった。（鐸木道剛、定村忠士、前掲書、p. 23。）
- 5 これらの地域では、キリストにその神性のみを認める単性論が説かれてきた。キリスト単性論にあっては、キリストの人性、つまりキリストが人でもあったことは重視されない。したがって、神であるキリストの姿を描くのは偶像崇拝にほかならないのである。451年のカルケドン公会議において、こうしたキリスト単性論は異端とされ、両性論が採択されて「イエス・キリストは真の神であり、かつ真の人間である」ということが教義として確立した。
- 6 オリゲネス (185頃-254頃) は、アレクサンドリアのクレメンス (150頃-215頃) ——教父哲学の祖とされる——の跡を継ぐアレクサンドリア学派の代表者として、聖書釈義の伝統の礎を築いた人物である。オリゲネスの教説の一部は後の時代からすれば逸脱した部分があったため、オリゲネスが没してから約 300年を経た 553年の第五回公会議でオリゲネス派は異端とされるに至った。
- 7 ゲルマノス一世『異端と教会会議』, *Germamus I, De haeresibus et synodis*; PG 98:80A (Meyendorff, *op.cit.*, p. 45).
- 8 ヨハネネス・ダマスケヌス『講話』, John of Damascus, *Or. I*; PG 94 :1236C (Meyendorff, *op.cit.*, p. 45).
- 9 ヨハネネス・ダマスケヌス、同、*Ibid.*; PG 94: 1245A (Meyendorff, *op.cit.*, pp. 45-46).
- 10 Meyendorff, *op.cit.*, p. 45.
- 11 J. D. Mansi, *Sacrorum conciliorum nova et amplissima collectio*, vol., 13, Graz, 377C-380A (鐸木道剛『『もの』としての聖書、『もの』としてのアイコン』、西南学院大学博物館研究叢書『キリスト教の祈りと芸術——装飾写本から聖画像まで——』所載、花乱社、2017年、p.67)
- 12 上掲書、p. 67。
- 13 Meyendorff, *op.cit.*, p. 48.
- 14 ストゥディオスのテオドロス『聖像破壊論者反駁』Theodore the Studite, *Antirrh.*, III., PG 99: 420A (Meyendorff, *op.cit.*, p. 48).
- 15 Meyendorff, *op.cit.*, p. 52.
- 16 *Enchiridion Symbolorum, Definitionum et Declarationum de Rebus Fidei et Morum*, H. Denzinger, Editio xxx VI, Herder, Romae, 1976, pp. 125-126, Symbolum, 19, lun. 325 (『カトリック教会文書資料集——信経および信仰と道徳に関する定義集——』、H・デンツィンガー編、A・ジンマーマン監修、浜寛五郎訳、エンデルレ書店、1992年)。
- 17 谷隆一郎『アウグスティヌスと東方教父——キリスト教思想の源流に学ぶ——』九州大学出版会、2011年、p. 218。
- 18 アタナシオス『ロゴス（言）の受肉』第 54 章（上掲書、p. 218）。